「蚊がいっぺんに落ちます」

増山雄三

戦国時代の紀州に、「雑賀（サイカ）党」という、奇妙な武士集団があったが、彼らは今の和歌山市の南にある岬辺りに群がって住んでいて、全員が「鉄砲」に習熟していた、いわば射撃技術の集団でもあった。

ところで、日本における鉄砲の歴史は、天文十二年（一五四三年）、種子島に漂着したポルトガル船の船長が〝島主の種子島時堯に一挺千両で、二挺売りつけた事から始まり、十二年後の厳島合戦では、早くもこの新兵器が戦場に現れ、六～七挺で敵を悩ました。

この時、敵が受けた恐怖は大きかったというが、織田信長は早速この鉄砲に注目し、武田信玄との長篠ノ合戦で、三千挺という驚異的な火力によって、武勇の名家は粉々に砕け去ってしまい、日本の近世は幕をあけた。

さて、このサイカ党という、大田舎者に早く鉄砲が伝わったのは、種子島時堯の館に居候していた、紀州根来寺の僧が、この鉄砲を見て一挺を譲り受け、他国に先駆け、早くから火力装備を持ち、日本史を動かした。

それで雑賀は、根来に近かったので、雑賀衆も鉄砲に習熟し、仕官はせず技術傭兵となり、戦国期を通じフリーの戦闘タレントに徹していたが、本願寺一向宗に入信したため、極楽往生のため、ゼニもイノチも要らぬという事になり、その結束は崩れてしまった。

当時、最新鋭装備を持った織田軍も、石山本願寺に籠るサイカ党には、手も足も出なかったが、兵糧や弾薬まで自前で戦をしたサイカ党は、苦労を重ねたものの、本願寺側は信長との屈辱的な講和をしてしまったので、彼らは、故郷の紀州雑賀荘へ戻っていった。

その時、党の首領だった雑賀孫市という人物が足に負傷したが、ひょうきんな孫市は、帰国して戦を思いだし、「陣場おどり」という

うものを、足をひずりながら踊り、今でも紀州では、民踊りの一つとなり続いている。

それで、本願寺と信長の間で起った合戦の様子を書いた、大阪の雑誌社に、「紀州雑賀の者だが」といって、和歌山県有田市でカトリ線香を作っている、雑賀伊一郎という老人が訪ねてきて、「サイカ党の事をもっと詳しく書いてくれ」といったのである。

それで、編集長が知る限りのことを話し始めると、老人は大きな字で、それをノートにとったので、いったい、何にするんですかと編集長が聞くと、老人は、いま全国に散らばっているサイカ党に教えてやるのです、と答えたのでさらに聞くと、彼は、「全国雑賀会会長」だといいながら続けて、いやいま組織中ですがね、といって大声で笑った。

彼は、老後の楽しみで、全国各地で雑賀姓の人を探し、会費は無料で何の義務もなく、政治目的もない平和な同姓の集いにするといって、雑賀会へ入ろうと呼びかけている。

この会は、この老人が作るカトリ線香と同様に、人畜無害の会の様だが、手土産は太い渦巻線香で、「蚊が、いっぺんに落ちます」といい、その威力はどうやら、サイカ党の鉄砲に似ているようなものに違いない。

令和四年三月